

幼児教育の基本となる乳幼児 の発達と遊びと学びの特徴

無藤 隆（白梅学園大学）

人はどのようにして育つの？

0歳から5歳へ、そして学童期へ、発達や学びはつながっていきます

人は周囲の環境に自ら働きかける力をもつ

- ◆ 人は生まれながらにして、自ら育つ力、周囲の環境に能動的に働きかけようとする力をもっています。
- ◆ 幼児の心身の諸側面は、それぞれが独立して発達するものではなく、遊びの中で相互に関連し合って発達していきます。
- ◆ 幼児期は自己を表出することが中心の生活から、他者と関わり合う生活を通して、自我の発達の基礎が築かれていきます。

0歳



愛情に包まれて
すくすく育つ

★ 視覚、聴覚等の感覚が育ち、座る、這う等の運動機能が発達します。特定の大人との関わりを通じて、情緒的な絆が形成されます。

♥ 愛情深く応答的で穏やかな関わりを重ねます。

1歳



自分で歩き出し
世界と出会う

★ 身体的な成長や感情表現の成長が著しい時期です。手で感触を確かめ、道具も使うようになり楽しさが広がります。

♥ 安全に十分気を付け、子どもの動きや気持ちを支えます。

2歳



イヤイヤニコニコ
いろいろな気持ち

★ 自我が最も発達します。言葉も増えてきて、おしゃべりが楽しくなり友達と同じ動きを楽しむようになります。

♥ いろいろな体験を親子で楽しみ感じる経験を重ねていながら、子どものやりたい気持ちが育っていきます。

3歳



やりたいことが
いっぱい

★ 言葉も滑らかになり一人でできることが増えてきます。「これが好き」「もっとやりたい」と自分の気持ちを出しながら遊ぶようになります。

♥ うれしい気持ちを受け止め楽しく遊ぶ時間を大切にします。

4歳



自他の違いに
気付く

★ 言葉や運動が成長する時期です。楽しい経験を重ねると同時に、自己主張し友達とぶつかるなど葛藤体験を通して友達の思いにも気づきます。

♥ 自分のやりたいことにじっくり取り組む姿を大切に認めていきます。

5歳



自己を調整し
学びへと向かう

★ 友達と力を合わせて遊びや生活を作り上げる満足感や、自分の思いを發揮して遊びを創り上げる達成感を味わい、自信を付けていきます。

♥ 協働して取り組める機会を作り、力を發揮している姿を認めていきます。遊びの中で学びを深めている姿を受け止めていきます。

自ら学ぶ
小学生
中学生

青年

大人

家庭と園で連携し、協働して育てる

- ◆ 生活の場で対人関係の広がりに伴って、興味や関心が様々な対象に向けられる中で思考力の基礎が培われていきます。
- ◆ 幼児期の教育は、家庭と園で行われ、両者は連携し、協働して一人一人の育ちを促すことが大切です。

<表記の説明>

★ 発達の特徴

♥ 教師や保護者の関わり方のポイント

《充実・発展》 様々なものや人との関わりを深め自分の世界を広げていく

《安心・安定+広がり》 様々なものや人との関わりを通して好奇心・探究心・協同性等が育つ

《安心・安定》 幼児が健やかに育つ基盤

幼児教育の基本をなす考え方(1)

- 乳幼児期の成長は家庭での養育が基盤をなす。
- 近年、幼児教育施設における教育が（単に子供を預かることを超えて）積極的な教育の意義を担うようになった。特に、従来以上にその成長を促すこと、家庭教育の不十分さがある場合にそれを補うこと。
- まだ系統的な学習に向かう以前の時期であり、身の回りのすべての環境から学び、そこから「世界」「世の中」のあり方を知っていく。
- 学ぶべきことは、その世界・世の中を構成するすべてのことの始まり（芽生え）についてである。（5つの領域として整理している。）
- 子供の学びは、その関わろうとする意欲と意志（何かを目指して粘り強く取り組む）に基づく活動を通して、結果的に生まれる。
- そのような意欲に満ちた自発的で能動的に周りの物事また人に関わっていく活動を「遊び」と呼ぶ。その遊びを通して世界の何についてもその特徴や関わり方を分かっていく。
- さらに興味を持ち、やってみたいことを目標とし、それに向けて粘り強く取り組み、工夫することがその遊びを通して育っていく。
- 遊びを通して乳幼児はこの世界への信頼と自らへの自信を形成し、この世界に生きることについての肯定的なあり方を身に付けていく。

幼児教育の基本をなす考え方(2)

- 子供（特に満1歳前後以降）は、環境での出会いから学ぶ、大人から学ぶ、子供同士から学ぶ、と多面的に広がる。
- 親（保護者）との安定した愛着をベースとして、それが次第に保育者・仲間へと広がる。
- 3歳以降、仲間集団での学びが大きくなっていく。一対一の親しい関係から集団としてのルール（規範）の学びへと発展していく。
- 保育者の直接的教示も、見守りも、また導き（ガイド）も場合により使い分けていく。
- 子供はどの環境においても、興味を持ち、気付きが生まれることを通して学んでいく。そこに体系性は必ずしもないが、あちこちでバラバラに学んでいることが次第につながっていくようになる。
- つながりをつけることは以前のことを今につなげ、またこれからのことを期待し計画すること、また並行することを結びつけるなどを通して生じる。
- 幼児期の終わりに近づくにつれて、直感的理解から言語的理解へと移行していくが、その始まりは体験した気付きを言葉にする試みから始まる。

幼児教育の基本的枠組み

- 乳幼児は環境への関わりを通してとりわけ自発的な遊びを通して学ぶ。
- そこで育つ基本的な力を資質・能力とし、気付くこと（知識及び技能の基礎）、思考し工夫すること（思考力、判断力、表現力等の基礎）、意欲を持ち粘り強く取り組み協力すること（学びに向かう力、人間性等）からなると整理した。それは認知面（気付きと思考）と非認知面（学びに向かう力）とからなる。
- 具体的な内容として5つの領域を措定する。健康、人間関係、環境、言葉、表現である。
- 資質・能力をその具体的な内容をもった活動を導くことにより育てていき、それは例えば、幼児期の終わりには10個の姿として整理もされている。

幼児教育では一人一人をケアし、学びを見定め、育ちの筋道を捉える

- 子供は大きく言えば、同じ方向に向かって育っていく。
- しかし、丁寧に細かく見ればその育ちの筋道は一人一人異なり独自である。明確な発達段階で語り尽くせるものではない。
- 元々の能力や気質にもかなりの個人差がある。家庭生活での違いも大きい。
- 幼児教育（保育）として大事なことは一人ごとの違いを受け止め、その存在を安定したものとして支え、周りの環境へと出会いを可能にし、好奇心を広げ、追求を導くことである。
- 時に記録（写真と簡単な記述）で個々の子供また集団の様子を捉えつつ日々の保育を進め、さらに数か月単位で一人ごとの育ちを捉えるようにしていく。
- その育ちの様子を保育者何人かで話し合い、次の保育の方針を立てる。
- その育ちの様子を随時、保護者に伝え、ともに育てていく関係を作っていく。
- 子供は乳幼児期から主体であり、保育者もまた導く主体であり、子供の集団も社会へとつながる主体としての働きを担う。社会文化のエージェントとしての保育者は子供一人一人との関係を活かして、社会へとつなぐために園の保育を文化として成り立たせていく。

保育者の専門性の発揮とは

- 乳幼児期の教育・保育は何より子供の主体性の発揮に基づき、そのさらなる育成を図ることを根本としている。その子供の主体性を発揮しつつ伸びていくあり方を実現しようとするのは大人側のいわば社会としての総意であろう。それを受けて、保育者はその子供を育成する願いをもって保育に関わる。
- 保育者は単に保育のマニュアルに沿ってその通りに保育するというのではなく、子供の成長していく姿を捉え、その都度の子供の状態の理解をし、それに基づいて、園の環境を整え、直接・間接の関わりを通して子供を育てていく。そこに保育者の専門性がある。
- その専門性とは保育者が人間として子供をより良く育てたいという願いの元で計画を立て、実施していくという営みを可能にする。そこに保育者の主体的なあり方が発揮される。
- 保育者が主体的であるとは、子供の主体性を尊重し育成するということを含み込んだいわば二重の主体性（共主体性、コエージェンシー）に基づいている。

乳幼児期の発達の特徴

- 親子関係の愛着から安定した関係が育ち、そこから外への探索が生まれる。
- 気質その他の個人差の違いは大きい。
- 子供による発達の筋道の独自性は従来 of 想定以上に大きい、ある範囲に留まる。
- 認知面として、一般的な知能の発達とともに、特定の内容領域ごとの発達の傾向は生得的ないしごく小さい時期から見られる。
- 0歳・1歳くらいは主に直感的身体的な基盤が働く。2歳ないし3歳くらいから表象機能が発達し、一段上のより自覚された発達へと移る。
- 非認知面として特に感情のコントロールと思考のコントロール（とりわけ実行機能）が重要であり、その顕著な発達が4歳から6歳に見られる。感情・認知ともに実行機能の知的働きが関与する。
- 幼児期は文化社会との関わりが大きくなり、そこから様々なことへの好奇心と学びが生まれる。周りの物事と共に大人や年長時の振る舞い・言葉・対話から学ぶ。
- 小学校以降、より集中的で自覚的で効率的な学びへと向かう。思春期の混乱を経て、成人期の成熟へと向かう。

乳幼児期の遊びにおける学びの特徴（1）

- 幼い子供が他人から学ぶことは多い。赤ん坊は特に世話をしてくれる人の元で安心して過ごし、そこからの情報を敏感に察知している。人々が何をして、なぜするのかを、自分から進んで考え理解しようとしている。その情報を自分の経験で得た情報と高度な方法で組み合わせる。子供たちは世界の仕組み、そして周囲の人々の心理と社会的な関係を理解していく。
- 子供たちは周囲の人々を見て、それを真似て学ぶ（観察学習）。また他の人が世界の仕組みについて話していることを聞いて学ぶ（証言からの学習）。
- 模倣は機械的に同じことをするのではない。物体の仕組みを知る。人がなぜその動きをするかを知る（意図・目標・目的の学習）。
- 原因と結果について学ぶ方法は、試行錯誤、そして他の人や出来事を観察することによる。
- 学習は大きく「利用」としての学習と「探索」としての学習に分けられる。利用では効率を求める。探索ではすぐに効果はなくても、多くの可能性を試そうとする。後者は特に幼児期において中心となる。

乳幼児の遊びにおける学びの特徴（2）

- 幼い子供は他人の発言から多くを学ぶ。自分がよく知っている人、たとえば親や園の先生の言葉を信じる。自信のある話し方をする人から、また博識の人から学ぶ。
- 物語のような想像の世界を本当のこととごっちゃにはしない。反事実の世界として理解するが、心情的影響は受ける。
- 子供は質問をすることから学ぶ。つまり、知りたい情報を要求する。「なぜ」という質問で因果関係を知ろうとする。
- 子供は親密で自由に生き生きとした会話に参加することで学ぶ。さらに、多様なスキルと持つ多くの違った人を観察・模倣することによって学ぶ。多くの違う人々が、多くの違うことについて、多くの違う方法で話すのを聞いて学ぶ。
- 遊びは多くのことを柔軟に違うやり方で行えるようになることを助ける。
- 遊びは仮定のあるいは事実とは違うことを考える能力、別の世界の可能性を考える能力と深くかかわっている。
- 幅広く調べ、でたらめに行動し、ばかげたことを試し、理由がなくても何かをする。そのためには、結果は関係なく、調べること自体が楽しいものでなくてはならない。
- ガイド（導き）付きの遊びは教師・保育者のモデルになる。「足場かけ」である。

乳幼児期の遊びにおける学びの特徴（3）

- 子供は発見学習（体験活動とそこからの気づき）のあとに完全習得学習（系統的にきちんと習得していく）の仕方を身に付ける。これら二つの種類の学習の基本的なメカニズムは異なっていて、かかわる脳の部位までも異なっている。完全習得学習には一種の管理された目標が求められるが、それは幼児にはできない。学齢期の子供の脳ははるかに効率的で有能だが、狭いところを追求する。
- 人為的につくられたスキルを身に付けるために、子供の自然な学習能力（幼児期の）をどう高めるかが大きな教育上の課題となる。例えば、幼い子にみられる直感的な数字の理解と、測定可能な数学的計算スキルの間には連続性がある。そこで幼児期に探索的に数量に出会い直感的なセンスを身に付けるようにして（数える、大小・多数の比較など）、それを元に系統的に確実な計算を可能にするスキル（筆算）を習得するという方式が生まれた。
- 学齢前の子供の注意の幅広さは、多様なものへの興味が展開し、そのことによりかえって、柔軟な学習を可能にする。そこに幼児期の遊びの意義がある。それに対して、学齢期になるに従い、注意力をコントロールして集中させることで、何かを素早く行うことができるようになる。そこで授業としてクラスとしての学習活動が成立する発達の根拠がある。

幼児教育での学びとは：まとめ①

幼児教育での学びをこうとらえることができる。

大きな意味での発達的な変化はある。たとえば、無自覚的なところから徐々に自覚へと進む。また、表面的な理解から仕組みの理解へ進む。ただ、それ以上の細部の順序性を想定しない。

たとえば、雪や氷が冷たい、手に乗せていると溶けてくる、雪や氷は水なんだ、といった気づきはその前にどういう気づきがあり、その後、どういう気づきがあるべきだとは想定しがたい。

幼児教育での学びとは：まとめ②

算数の基盤について、いろいろなものを数える中で、小さな数の範囲の中で、計数と足し算、引き算の基礎が形成される。(系列的な学びはその基盤の上に成り立つ。)

それは体験活動を中心とし、しかも園の環境での出会いから始まるので、その都度の機会があって成り立つ学びだからである。それらの学びが互いに少しずつ繰り返しを通して繋がり、網の目状の知識が構成されていく。

認知能力と非認知能力を育てる①

認知能力とは知的な力である。そこには、知識・技能、思考力などを含める。

非認知能力とは意欲・意志、また自覚し見渡す力、人と協力する力などを含める。つまり、学びに向かう力の育ちである。

どちらも、乳幼児期（とりわけ3から5歳児）さらに学童期・思春期を通して育つものである。

認知能力と非認知能力を育てる②

認知と非認知は相互に関連し、支え合って、育っていく。

1つの活動の中に認知面と非認知面が必ず含まれ、共に育つ。

いずれも資質・能力の基礎を保育のプロセスとして捉え、子供が意欲を持って取り組み（学びに向かう）、様々なことを見だし（気づき）、試行錯誤しながら工夫すること（思考力の芽生え）が生まれ、発展していくのである。

非認知能力とは（研究のまとめ）

- 主に意欲・意志・情動・社会性に関わる3つの要素からなる。
 - 1) 自分の目標を目指して粘り強く取り組む。
 - 2) そのためにやり方を調整し工夫する。
 - 3) 友達と同じ目標に向けて協力し合う。

特に幼児期（満4歳から5歳）に顕著な発達が見られるが、その後、学童期・思春期の発達を経て、大人に近づく。

気質差、個人差が大きい。

自己をコントロールすることが基礎にあるが、それは認知と非認知の両面を必要とする。

教育を通して育成可能性があることが分かってきている。